



TITLE:

<研究論文>終末期への宗教的関わり の実際：浄土真宗僧侶のライフス トーリーからの探索

AUTHOR(S):

川島, 大輔

CITATION:

川島, 大輔. <研究論文>終末期への宗教的関わりの実際：浄土真宗僧侶
のライフストーリーからの探索. 教育方法の探究 2004, 7: 39-47

ISSUE DATE:

2004-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190294>

RIGHT:

終末期への宗教的関わりの実際

—— 浄土真宗僧侶のライフストーリーからの探索 ——

川 島 大 輔

1. 問題と目的

人間存在は常に自らの生きる意味、そして死の意味するものを探求しようとする。即ち、意味を求める存在である (Kenyon 1999: 7)。この意味への志向性は人間存在にとって根源的なものである一方で、人生の終局にある人間、即ち自らの根源的価値を揺さぶられている人間にとっては特に顕著に現れてくるものである。つまり、死に直面することでそれまで自らが保持してきた自己の世界に対する基本的な存在論的前提が打ち碎かれるために、生と死の実存的意味を見出そうとするのである (eg. Crossley 2000)。

ところで、死の意味づけは行為主体たる個人の意味への志向性のみにて獲得されるものではない。Kenyon (1999: 9) は、死という実存的意味は、個人的であると同時に社会的であると述べているが、社会文化のうちに潜在する大きな物語を提供している信仰や宗教的信念のなかに自己の主観の意味が組み込まれ醸成されることを通じて、或いはそれらを積極的に志向することを通じてその意味づけを獲得していくと考えられる。

しかし、このような死の意味づけと社会文化的影響としての宗教や信仰との重大な連関にも拘らず、これまでの死生観や死への態度に関する研究 (e.g. Neimeyer & Brunt, 1995) は、信仰の重要性を認識しながらも、その有無が死の不安や恐怖を低減させると述べるに留まり、それらが如何に死の意味づけに関係するのかについては未だ明らかにはなっていない。更に、特に欧米において、キリスト教との関係性について莫大な研究知見が集積されているのに対し (e.g. Thorson & Powell, 1990)、我が国において多大なる影響を

及ぼしている仏教との関係は、この分野における先駆的な社会心理学的研究を行った金児 (1997) らごく少数を除き皆無であると言っている。従って、死の意味づけを把握する際には、顕著な影響力を持つ信仰や宗教、特に我が国において甚大な影響力を保持する仏教のものの見方と如何なる関係を有する中で意味づけを構築するのかに着目することが肝要である。

上記の問題点を鑑み、川島 (2004) では、老年期にある浄土真宗僧侶へのインタビューを通じて、一個の主体が個人的経験と教義的解釈の如何なる関係性のうちで死の意味づけを獲得するのかを、その発達過程とともに明らかにしている。但し、そこで専ら注目されているのは彼らの主観の意味づけであり、彼らが専門家としてどのように他者と関わっているかについては簡単に触れるに留まっている。しかしながら、臨床・実践場面からの要請、つまり終末期の個人に如何に関わるか、についての有意義な示唆を提供するためには、物語の提供者たる僧侶の死に対する内的枠組みを明らかにするに留まらず、その枠組みを背景として実際にはどのように門徒や友人に関わっているかを明らかにしなければなるまい。その為には、彼らの宗教的関わりの特徴や中核的要素、関わり方の多様性、そしてそれらを取り巻く諸問題を明らかにすることが必要であろう。

従って、本研究では次のリサーチクエッションを設けた。即ち、浄土真宗における宗教的関わりの中核を成すものは何であるか、それは対象の違いによってどのように異なるのか、そしてその実践においては如何なる困難が存在しているのか、である。

2. 方法

(1) 調査対象者

本研究では以下の理由より浄土真宗に着目する。即ち、一つには極楽浄土の思想を通じ日本人の心性に深く影響している点において、二つには煩惱から離れることのできない存在として人間を位置づけているが故に、単なる教義の表層的解釈を超えた教義的解釈と個人的経験の豊かな力動性を描くことが可能である点において、そして三つには浄土真宗本願寺派のビハークラ運動¹に関連し、ケア提供者側の内的枠組みを明らかにすることで、ケア対象者との相互行為によって成り立つ臨床・実践場面への有意義な示唆を呈することが可能である点において、である。

具体的には10名の浄土真宗僧侶（男性9名、女性1名；平均年齢は78.4歳）を調査対象とした。

(2) 調査方法

2003年7月上旬から11月下旬までの5ヶ月間に亘り半構造化インタビューを実施し、一件を除く全てのインタビューは許可を得て録音された。尚、本研究で分析の対象となるデータは、門徒や友人の死に関する質問²への返答によって構成されている。

(3) 分析方法

分析手順は、やまだ（2003）に準じた。具体的にはまずインタビューで録音された内容をテキスト、即ち文字記録に変換する作業を行った。尚1次データはインタビュー前後の雑談、対象者の著作、檀家への配布物など多様なソースを参考にしながらも、主としてインタビューにおける語りを中心に構成されている。続いて1次データから2

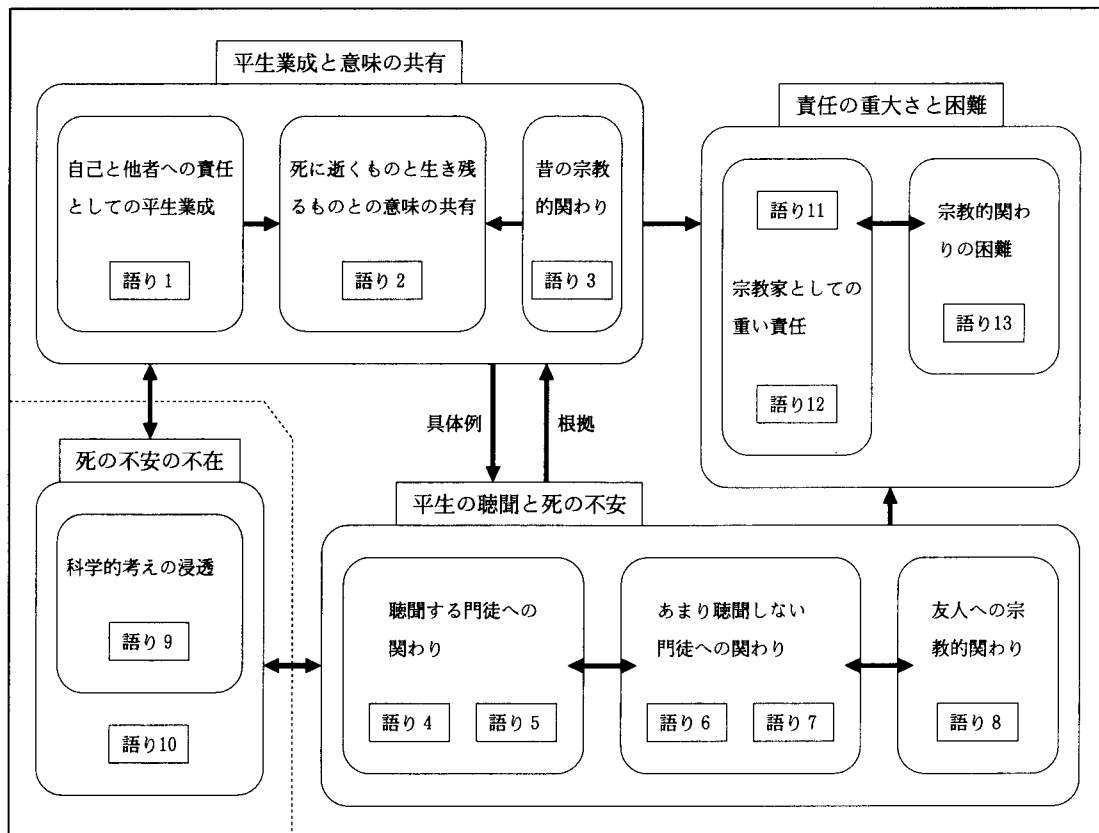


図1 KJ法における浄土真宗僧侶の宗教的関わりの諸相

次データへの加工、カード化、図解化までが一連の手順で行われた。³

3. 結果と考察

分析の結果、大きく4つの相互連関する意味の纏まりが得られた。即ち、図1において見られるように、平生業成と意味の共有、平生の聴聞と死の不安、死の不安の不在、そして責任の重大さと困難である。以下、具体的に考察していく。

(1) 平生業成と意味の共有

① 自己と他者への責任としての平生業成

浄土真宗の根幹を成す教えの一つに『平生業成』という言葉がある。「平生」とは現在を意味し、「業」とは人生の大事業、即ち人生の目的である。そして「成」とは完成を意味する。つまり、人間存在は現在生きている間に人生の目的を完成することができるというものであるが、そのためには日ごろから仏法を聴聞することで、念仏の教えを頂くことが重要であるという。

語り1 自己と他者への責任としての平生業成 (E)

E ; やっぱ生きてるうちに、ちゅうかなできるだけ若いうちに、あの、仏法にこうたしなんでおいていただくということがやっぱり一番大事じゃないかなと思ってねー。だから病気になってから、あの、とかね、死に際になってからというのでは遅いんですよね。それはね、ちょうど病気になって、死にそうになった人に、遺言書けちゅうのと同じことでね、あの、ふふふふ、そんなことはね、早くやとくべきなんです。自分の人生を生きる自分の責任としてね。うーん、だから、ほんとうにこう若いうちから仏法にたしなんでおけば、どんなような死様でもいいということになっておればね、あのー、それで、なんちゅうかね、家族の人たちも安心ができるでしょうね。(中略) お互いにね。自分がこの世を生きる責任として、自分自身の責任として、また周辺の人への責任としてでもそういう生き方をしてるっていうことがね、大切なことじゃないのかなと思うんですよね。

それは即ち語り1'において示されているように、自己の死に対しての意味づけを成就させるという責任として位置づけられているのである。

また、遺されるものが彼らの死を悲嘆することのないよう、常時より意味づけを成就させている姿を周囲に対し示すことが重要であるとも述べら

れている。これは即ち、死とは非常に個人的なものである一方で、関係論的であることを意味している。

② 死に逝くものと生き残るものとの意味の共有

死の意味づけが関係論的であることは既述のとおりであるが、意味づけの獲得においても、それは死に逝く個人単体で成し得るものではない。即ち、浄土真宗という死の物語を提供する僧侶のみならず、遺される家族や友人との意味の共有なくして、意味づけは叶わない。つまり語り2が示しているように、平生の聴聞などを通じて教えに触れることは、個人の死の不安や遺族の悲嘆を軽減するための道具として作用する側面を持つ一方で、本質的に意味づけの成立要件として不可欠のものなのである。何故ならば、意味づけの成就とは自己の連続性のみならず、生者と死者の関係性が死後も「浄土」の世界を通じて保持されることを意味しているために、生前において重要な他者と共有され得る意味づけが構築されていない場合、ともに出会える世界としての浄土は自らの物語とは成り得ないのである。⁵

語り2 死に逝くものと生き残るものとの意味の共有 (E)

E ; これはやっぱり、平素からね、やっぱりその念仏の教えていうものに生かされて、必ず浄土に往かせてもらうんだと、(死がありがたい) ということをやんでいく人も、生き残ってる人もね、みんながそれがあるからこそね、そういうことが言えるわけできるし、受け取れるわけでしょう。だからそれは死に際になってるその人にね、あんたお浄土へ往くんじゃが言うてみたってね本人そんなもの受け付けないと思うんですよ。だからこそそれはね、若いうちに、生きてる、健康なうちからやっぱり、できれば仏法に聴聞することでね、みんながそういう思いというものを持たせてもらうということが、一番肝心やろうと思うんですが、うん。

③ 昔の宗教的関わり

このような意味づけの共有の重要性は、元来我が国、特に信仰の厚い地域社会においては顕著に見られたものであり、そこでは自ずと死に逝くものと遺されるものとの間に死の意味づけの共有が見られたものであった。語り3はそのような状況

語り3 昔の宗教的関わり (E)

E ; これは当時の能登の人生の別れの挨拶だと思うんですね。あんた死ぬんじゃない、お浄土に生まれ変わらしてもらうんだと、しかも仏様にならさせてもらうんだから、それはありがたいことだと、言ってるんですね。だからありがたいと思うて、お念仏申しやとこういう言葉をね、お母さんが娘に対して、かけてるんですね。これは当時のやっぱり能登のみんなそういう別れがあったと思うんですね。これはねー、あそこはね、見舞いに来た人がね、その娘さんのそばで静かに念仏を2、30分唱えて帰っていったちゅうんですね。これはやっぱりね、みんながね、やっぱりその、念仏の教えというものに、あの、いただいておらなければ、そういう状況は成り立たないと思うんですね。

K ; そうですねー。

E ; 今ね、なんでもない人に病気の見舞いに行つてね、そない、そやつてなんまんだぶと念仏唱えとつたらね、みんなびっくりして、あんた何いうてんやということになるでしょう。だけど、能登あたりの明治から大正にかけてのそういう時代は、やっぱりその念仏いうのがみんなにこう行き渡っておったんですね。そうすれば、娘に対してもあんた死ぬんじゃないんだというようなそういう言い方、お念仏申し上げちゅうなことなんかね、今のお母さんでできるかなーと思ったりするんですけど。

を表した一例であるが、死を有難いものとして捉える浄土真宗の教えが共通の物語として集団の成員によって構築されている様を表している。しかし、このような地域社会における物語の共有は現在では困難であるとも述べられており、新たな宗教的関わりが意味づけの提供者たる僧侶に求められているといえよう。

(2) 平生の聴聞と死の不安

平生業成の重要性を示す具体的事例として多くの語りが呈されたが、対象者の属性によって大きく3つの内容に区分できる。即ち、聴聞を頻繁に行う門徒に対するもの、聴聞しない門徒に対するもの、そして浄土真宗という共通の基盤を有しない友人に対するものである。以下具体的に記述する。

① 聴聞する門徒への関わり

平生から頻繁に聴聞を行う門徒は、死の不安や恐怖を訴えることは少ないという。つまり、語り4及び語り5において見られるように、絶えず仏法に触れることで自ずと浄土真宗の教え、即ち死

語り4 聴聞する門徒への関わり (E)

F ; あ、臨終に立ち会うのは何べんもありました。私の田舎でもそうです。これは私がまだ18、9のときやった。そのときなんかでも、助学校なんか言うのでもその時分うちの実家でもやってました。日曜に子どもを寺に集めて。その中に* *君ちゅうのがおった。その子は病気で死にました。死ぬ時に立ち会いました。仏様のところへ行くんやで、お浄土へ行くんやでちゅうて、本人は、はい、もうそれを聞くなり、なんまんだー、なんまんだー言うて、喜んで往生しました。ええ。もう一人はこれはそのときの檀家さんですけど。もう80なんぼやったか。その人も立ち会いました。その人もそうです、喜んで喜んで死にました。

語り5 聴聞する門徒への関わり (A)

A ; あの一、私たちの知ってる限り、よくその、まあ、私たち聴聞って言ってるんですけども、ご法をお聞きになっておられる方々は、非常にその、あんまり不安なく、死んでいる方は多いような気がしますね。

は悲しみだけではなく浄土への帰還を意味する非常に有難いものであるという教えを自らの死に対する意味づけとすることができているからこそ、安心し喜びながら死に至ることができる。つまり平生業成を成し得たならば、個人は死に直面した際でも意味は既に個人のうちに構築されており、改めて意味の探求を行う必要性はないのである。この意味において、この関わりは浄土真宗において最も理想的な形であるといえよう。

② あまり聴聞しない門徒への関わり

一方で、平生に聴聞する機会を減多に持たず、浄土真宗の教えに触れることの少ない門徒においては、自らの死に直面した際に、自己の連続性及び他者との関係性を維持することができず、語り6において見られるように、不安や恐怖を顕わにするという。特に顕著であるのが、これまでの人生において犯してきた罪や、それ故に死後、地獄の業火に苦しめられるかも知れぬという恐怖や不安である。しかしながら、それは決して意味が永遠に見出されないということを指しているのではない。即ち、語り7が示すように、平生において死の意味づけを構築できなかった個人は、死に際し強い死の恐怖や不安を表す一方で、それを贖う

語り6 あまり聴聞しない門徒への宗教的関わり (A)

A ; 平生あんまり来なくて、私達の真宗門徒の方で、若い世代の人たちがあのおま、大変、ショックを受けるような病気になるですね。そうすると、自分の過去の罪をものすごく心配される方がやっぱりおられる、私の経験上はね。

K ; 過去の罪を。

A ; はい。あの、まあ、今の時代には通じないと言われそうですが、こんなことをしておったら地獄へ行くんじゃないかと思う、そういう平生聴聞されてない方で非常に不安がっておられる方は私の経験上はおるといえることですね。(中略)ですから、聴聞されてない方で、ご門徒の方ですとね、やっぱり大変心配、心配っちゃうんか、あの、誰にも会いたくないとかね、そういうことを仰られる方がいます。私が行きますと、中へ通していただきますけどね。あの、親類のもん誰にも会いたくないという人もおられますね。

語り7 あまり聴聞しない門徒への宗教的関わり (F)

F ; **君は昔の伝染病の恐ろしい、あれね病気でね。あれなんちゃうのかな。伝染病で。とにかくね、熱が出てね、体中が震えてくるような大変な熱が出るやつでね。それで、わずか半月ぐらいの入院で死にました。(中略) そやけど私の友達が僕の手を取ってね、死にたくない死にたくない言うてゐるんですわ。もがいて、苦しいし。死ぬのいやや、死ぬのいやや。かり手を握ってね。辛いだろう。辛いだろう。(涙を目に浮かべながら) 阿弥陀さんと一緒にやって私が言うやつたん。それが本人の心の中に届いたんでしょう。今までもがいていたその友達がね、涙ぼろぼろ流しながら、なあ、あー、言うて泣き出してね。同じ泣くのもやっぱりそういうね、私の言ったことがものすごく心に届いたんでしょう。今まで暴れていたのが、痛い辛い、いたいいたい、いややー死ぬのいややー言うてたんのが、それがじーっとだんだん大人になってね。なんまんだぶ、なんまんだぶって泣きながら念仏唱えてね。それが、私は、あんなにうれしいことなかったね。ええ。だから、お念仏というものはそういうもんじゃないですか。仏と共にという。

物語を求めているといえよう。そのような場において、僧侶が彼らに寄り添い、浄土への帰還、或いは仏とともにあるという語りを提供することにより、彼らは死の直前において漸く自らの死の意味づけを獲得するのである。

③ 友人への宗教的関わり

ところで、日常生活において殆ど仏教との明示的な関わりを持たず、浄土真宗という同一教団を通じた接点を有しない個人に対する宗教的関わりとは如何なるものであろうか。語り8は、癌を宣告された友人に対する関わりであるが、そこでも

語り8 友人への宗教的関わり (B)

B ; 女の先生でしたけどね、私よりちょっと若い。同じ学校へ勤めてましてね。でその人が癌にならしてね、可愛想にねー、癌っていうのはやっぱり、私もなったんですけど、その人は電話かけてきたときに、声震えとったんですなー、うーん。では是非会いたいちゃうて。何でも、私は辞めてる、その人も辞めてる、今更会いたいって何がーって言ったら、病院来ださいって言うてね、それで病院で、なんやどないになったんや、おうて話しますって、ガタガタ震えてましたよ、その人の声。

K ; うーん。

B ; それで行ったら、たー、ほんまにガタガタガタガタ震えてましたわ。可哀想に。(中略) もう末期症状で言われた。もうそれから私は、寝られへんわ、気は狂うみたいになって、もう死ぬんだと言うことが分かって、どないしたらええんか、これはもう校長先生されとったし、お寺のご住職であったから、そんな話しいままで聞いたこと無いから、是非聞かせてもらいたい。私はもう死ぬんですって言うてた。そのときに、臨終のほんまに話しをしましたね。

K ; あー。

B ; 人間は死ぬんやという話しをね。二編。そのときと、もういっぺんまた会いに行ったんですけどね、うん。そしたら主人が亡くなりました言うて、安心して死にました言うて、電話くれはってね。

やはり死の恐怖や不安が、僧侶の語る死の意味、即ち浄土真宗における死の意味を受容することで、安心して死に至るという一連の過程が見られている。このことより示唆されることは、日常的に浄土真宗と関わるということよりも寧ろ、個人が自らの死に直面し意味を求めた際に、それを供給する物語、即ちここでは浄土真宗が説く意味づけに触れることができるか否かということの重要性であろう。別言すれば、たとえ幾度となく法話などに参加していようと、個人の意味への探求なくしては如何なる教えも自己の物語とは成り得ず、より重要なことは個人が意味を探求する際にその意味づけが個人の周辺に存在することなのである。

ところで、平生に教団との接触を持たない個人は、それ故に教義の意味づけを他者と共有することは容易ではない。つまり、死の意味づけを提供する物語も個人の周囲には存在しないのである。それにも拘わらず、いやそれ故に個人は意味を強く求めるのであり、僧侶はそれに対し十分統合された物語を構築しておく必要がある。川島 (2004) は、死の意味づけが、知的理解の段階、体験的理

解の段階、そして統合の段階という発達過程を辿ることを明らかにしているが、それより導き出されることは、意味の提供者たる僧侶がいかなる段階にあるのかということの重要性である。従って、ここでの宗教的関わりに対して僧侶の年齢的影響は大きいと言えるだろう。

(3) 死の不安の不在

① 科学的考えの浸透

個人を取り巻く他者との教義的意味づけの共有が重要視される一方で、そのような関係性は最早現代社会においては構築され得ないとの語りも見られる。語り9はその顕著な例であるが、科学的

語り9 科学的考えの浸透 (G)

G: 昔のようみたいに死んだら地獄へ行って閻魔さんがというようなそんな不安はないみたい、はい。それはみなだいたい科学的考え方が浸透してきましたから。やっぱり世界観というのが変わってきましたね。うん。昔ですと、閻魔さんが舌抜くやとかいうようなかっこうで教えてましたけど、今そういうこと言いませんね。

K: じゃ、ほとんど自分が死んだらどうなるんだろうとか、怖いとかはそういうことは—

G: あんまり私は教えませんね。私は直接聞きません、はい。

考えが浸透し、地獄や死後の話から現実味が失せることで、死の物語を提供してきた教団の関わり方も変化しているという。即ち、門徒も彼らの死後の世界に対する物語を積極的に求めることを行わず、且つ僧侶もそれらを積極的に提供することはないのである。更には死後の不安ではなく、死に逝く過程に対する不安や、語り10が示すような自らの死後遺されるものへの憂慮が個人の物語を占めるのである。

この差異は何処より生じているのであろうか。川島(2004)は、浄土真宗僧侶の死の意味づけをストーリーの違いから分類し、教義的解釈を多用しているものと、個人の情動経験や心理的描写を多く表すものとは、前者が死後の世界に対する意味づけを行うのに対し、後者は死に逝く過程に対する意味づけを行っているとして述べている。この区分は、門徒にも当てはまり、僧侶と門徒のストー

語り10 家の心配 (G)

G: 後よろしゅう頼みますとよう仰います。それは家のことを。

K: あ、家のことを。ご自分にお念仏とかではなくて、家のことをなんですね。

G: そうそう。まるでコンサルタントみたいなことになってしまっていてね。自分のことをあんまり心配しておられるの、あんまりおうたことないね。まあ、自分では悩んでおられるんかも分かんけど。

K: そうですよ。そういうことをお聞きにならないので、そういうことをお話しは直接はされることはない。

G: はい。もう人間死んだらどうなるかということはありません。言うたことないですね、私は。

リーも一致している。つまり、相互行為としての死の意味づけは門徒の志向する意味、或いは物語と僧侶の内的枠組みを反映させた提供される物語との共同構築の産物なのである。

(4) 責任の重大さと困難

① 宗教家としての重い責任

平生業成を門徒が成し得るために僧侶には不断の関わりが求められているのであり、それは浄土真宗という枠組みを超えたところ、つまり同一教団という枠組みを超えたところでの関わりも強く求められているとの認識が語り11及び語り12から伺える。即ち地域社会で共有された死の物語の崩壊に伴い個人に直に要求されるようになった意味づけの獲得を支えることが求められているのであ

語り11 宗教家としての重い責任 (B)

B: あの一、そうなるとやっぱりねー、宗教家って、自分てんなこと言うたらおかしいですけどねー、責任は重いなーと思いますよ、うーん。そんな、お葬式や、あー、お葬式すんだ、あーなというような話じゃない、ほんとにその人の人生が終わるちゃう、終わった、それをどうするか、またどう我々は教化していくかという大きな仕事があるんやなと思ってね。

る。それは葬式仏教と揶揄される現状から脱却し、終末期において意味を求める個人への宗教的関わりを推進していくことに他ならない。

また、既に述べたように僧侶の年齢的要因の重要性に加え、僧侶自身も年配の門徒や両親などから意味づけを提供されるという方向性も存在して

語り12 宗教家としての重い責任 (J)

J ; 昨日も門徒が来てね。

K ; はい。

J ; ここでまあ、いろいろ喋ったけど。で、年は私がちょっと上なんですけど。まあ、いつでもあちこちで聞くことやから再確認したようなことだけど。うーん、や、いやと言いますやん。誰が順番に死ぬとは限らへん。

K ; うーん。

J ; で、あの、どうやらその門徒の人が私に、あの一住職さん、頼みますよー、私のことを、というやけども、(興奮して) そんなもの、お前、聞いたって私が先死ぬやわからへんのにそんなことは頼んだってあかんでー、いうて、それだけは堪忍してくれと、その頼むと。後のことは頼むとこういう。それはね、すごく私にとって責任が重いというか、そ、頼られておるとい、そういう存在にもう私になってるんだなと。

K ; うんうん。

J ; 年齢的になってる面もあるかも知れん。そうやなしに日ごろのお話をしたり、説法をしたりする中でね、この人は私の最後には頼んでもよい人というような思いを、ちゃんと養ってくれとんなー、いうことで、ある意味で、私は嬉しいわけですね。

おり、死の意味づけが他者との関係性のうちの相互行為によってのみ死の意味づけは構築されるといえる。

② 宗教的関わりの困難

宗教家としての責任の重大さという認識の一方で、その実践が非常に困難なものであるとも語られている。つまり語り13において示されているように、門徒との日常的な関わりでは雑務に追われることで時間をかけて対話をするのが難しく、またそれ故に本音を聞くことが困難であるとの心

語り13 宗教的関わりの困難 (C)

K ; 檀家の方が死んだらどうなるんだろうとあまりその不安を喋ることはあまりないんですか。

C ; あー。そこまでねなかなか聞いてもらえやしません。こっちのやっぱりもってき方が下手なん。へっへ。そこまでほんまに本音をね、出して、お互いが喋りあわないかんのやけど。そこまでやっぱり、うーん。こっちの親切がたらんと思いつて。

K ; あー。それは遺族の方でも、例えばお通夜の席とかで本人がその不安を語るのではなくー

C ; はー。それはたまにはねー聞かれてはるけど。んなにゆっくり喋ってやしませんしなー。それは勿論お話ししませ、ええ。

情が吐露されている。恐らく、平生業成が全ての個人において成し得ているならば、終末期において改めて確認するまでもないのであり、ホスピスやビハーラにおける霊的な関わりも必要ないはずである。しかしながら現状は異なり、門徒に至っても十分な関わりが行えてはおらず、それは僧侶自身の、そして教団の怠慢であると語られている。

また、近親者以外の臨終に実際に立ち会った経験をもつものは4名であり、しかも一個人当たりの数も多いとはいえない。つまり多くの死に関わる僧侶といえども、実際に臨終に立ち会う機会は少なく、終末期は寧ろ医師や看護師の手に委ねられており、宗教的関わりは殆ど行われていないといえよう。近年では、終末期へのホスピスケアなどにおいて宗教的関わりの重要性が叫ばれるようになって久しいが、現状における変化は乏しいといえる。

4. 総括的考察

(1) まとめ

本論を締めくくるにあたり、得られた知見を最後に確認したい。即ち、浄土真宗における宗教的関わりの中核を担うものは、平生業成という概念であり、その実践を通して死の意味づけが構築されると考えられる。さらにその平生業成が自己の連続性の保持のみならず、他者との関係性を維持するための不可欠な要素であることも示唆された。また、僧侶との教義を媒介とした関係性が構築されている場合とそうでない場合とでは、彼らが死に直面した際に示す不安や恐怖には差異が見られた。しかしながら、彼らが意味の探求を行う際の足場となることが可能であれば、そこでの相互行為には明確な違いは見られない。但し、そのような意味の探求を行わない個人への宗教的関わりは性質を異にするものであった。

(2) 実践場面への示唆

まず、個人が如何なる物語を求めているかへの配慮が必要である。即ち、既に述べてきたように、個人が死後の物語を求めているのか、或いは死に

逝く過程についての物語を求めているのか、という志向性を考慮した上での関わりが重要となつてこよう。但し、この志向性もまた、僧侶との相互行為のうちに構成されるものであるために、僧侶自身の意味づけの影響を省くことは不可能である。従って僧侶に求められることは、自らの内的枠組み、そして門徒の志向する物語の双方に対する反省的視点である。

次に、教義を媒介とした関わりを僧侶と構築しているものとそうでないものとは、異なった宗教的関わりを提供する必要がある。つまり、既に死に逝く個人のうちにおいて死の意味づけが構築されている場合には、僧侶は顕著な関わりを求められない。また、未だ意味づけを構築しておらずとも、個人の周囲に意味づけを提供する物語があり、他者とそれを共有できる場合においても、僧侶は寧ろその個人の行為を後押しすることを求められる。しかし、死の際まで教義と明確な接触を持たず、さらに周囲との共有も望めない場合、強い意味への志向性に対する物語を僧侶が提供するには、僧侶自身が意味づけを確立している必要がある。何れの場合においても、僧侶の果たす役割は大きいといえるが、現代社会においては寧ろ最後の関わりが強く求められ、そのためには僧侶自身が近親者の死や自己の死を意識する病などの経験を通じて、教義的解釈を自己自身の意味づけとしていなければならないのである。

(3) 本研究の限界と今後の課題

本研究では、意味の提供者としての僧侶に焦点化することで、宗教的関わりを取り巻く諸問題を概観してきた。しかしながら既述の通り本来それは対象者との相互行為のうちに存在するものであり、一方のみを取り上げ結論づけることは危うい。更には、個人を取り巻く宗教的関わりの行為者のみならず個人の家族や友人との関係性のうちにおいて宗教的関わりを捉えなければなるまい。従って今後は宗教的関わりにおいて他者との如何なる関係性が存在しているか、そしてそれらがどのように発達変化するのかについて検討していく必要

があるだろう。

また、老年期という年齢が宗教的関わりにおいて重要な役割を果たすことが明らかとなったが、今後は若い僧侶との比較などを行うことを通じ、宗教的関わりの実態をより詳細に描くことも必要であろう。

謝辞

ご多忙中にも拘らず適切な指導を頂きました、やまだようこ、遠藤利彦両教官にこの場を借りてお礼申し上げます。

参考文献

- Crossley, M. L. (2000). *Introducing narrative psychology: self, trauma and the construction of meaning*. Buckingham, Philadelphia: Open University Press.
- 金児暁嗣、(1997)、日本人の宗教性：オカゲとタタリの社会心理学、東京：新曜社。
- 川島大輔、(2004)、老年期の浄土真宗僧侶のライフストーリーにみる死の意味づけ、京都大学大学院教育学研究科平成16年度修士論文、未公開。
- Kenyon, G. M. (1999). Philosophical Foundations of Existential Meaning In G. T. Reker, & K. Chamberlain (Eds.). *Exploring Existential Meaning* (pp.7-22). Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage Publications, Inc.
- Neimeyer, R. A., & Van Brunt, D. (1995). Death anxiety. In H. Wess & R. A. Neimeyer (Eds.). *Dying: Facing the facts*. 3rd Edition. Philadelphia, RA: Taylor & Francis.
- Thorson, J. A, Powell, A. F. (1990). Meaning of death and intrinsic religiosity. *Journal of Clinical Psychology*, 46 (4), 379-391.
- やまだようこ、(2003)、フィールドワークと質的研究法の基礎演習：現場インタビューと語りから学ぶ「京都における伝統の継承と生成」、京都大学大学院教育学研究科紀要、49、22-45。

注

- 1 サンスクリット語で「休養の場所」を意味するこの言葉は、我が国独自のホスピスをと提唱された概念であり、日本人の心性に沿った仏教的終末医療としての理念を掲げている。
- 2 質問の例としては、「死の恐怖や不安を語る門徒にどのように関わられていますか。」「これまで身近な人を亡くされた経験はありますか？そのときのことを詳しくお聞かせ願えますか」が挙げられる。
- 3 本論文は、修士課程論文において十分に取り上げ

ることが出来なかった僧侶の門徒や友人への宗教的関わりに着目し、同一の1次データを用いながらも、2次データへの加工以降、再度分析を行ったものである。

- 4 語りに見られるアルファベットはA～Jが調査対象者、Kが調査者を示している。
- 5 死の後、浄土において再び見えることを、仏教用語では俱会一処とよぶ。

(博士後期課程)